

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13552

研究課題名(和文)近代チベット外交史の基礎的研究：政治的地位と領域の確立をめぐる

研究課題名(英文)Modern history of Tibetan foreign policy: A study of the political status and territorial issues in Tibet

研究代表者

小林 亮介(Kobayashi, Ryosuke)

九州大学・比較社会文化研究院・講師

研究者番号：50730678

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アメリカ・イギリス・台湾・日本など国内外での調査を通じたチベット語文書史料の取得と、それらの分析を通して、20世紀初頭におけるダライラマ13世(1876-1933)とイギリス・日本・アメリカなど列強各国との接触・関係構築の経緯を明らかにしつつ、これまで不明瞭な点が多かったダライラマ政権の対外関係の実態を究明した。それにより、ダライラマ政権による、清朝崩壊前後における、チベットの政治的地位と領域の確立に向けた模索の経緯が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、20世紀初頭におけるチベットのダライラマ政権(1642-1959)が、近代国家が存立していく上での要件となる、政治的地位(国際的地位)と領域(国境)の確保・確立をめぐる展開した、対外政策・対外関係の実態を究明したものである。とくに、これまでこの分野であまり利用されることのなかったチベット語書簡史料を用いつつ、ダライラマ13世(1876-1933)が、旧来のチベット仏教文化圏(チベット・モンゴル)を超えて、イギリス・アメリカ・日本などの列強諸国と接触・交渉を通じて、国際社会において自己意識を確立していく過程を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：My research focused on 13th Dalai Lama (1876-1933)'s relations Britain, Japan, and the United States at the beginning of the 20th century, by means of collecting and analysing the valuable archival sources in the Tibetan language, which were housed in archives and libraries in the Britain, the United States, Taiwan, and Japan. I highlighted the Tibetan government's attempts to establish their political status and territory, and that their foreign policies during this period were not thoroughly examined by previous researchers.

研究分野：アジア・アフリカ史

キーワード：チベット 中国 清朝 イギリス アメリカ 日本 対外関係 ダライラマ政権

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、複雑化を極める東アジア情勢の中で、チベットをめぐる民族問題は国際的に関心を集めつつも、特に理解が進んでいない分野のひとつである。研究の立ち後れの原因として、中華人民共和国に併合される以前のチベットが、中国を含む国際社会といかなる関係にあったのか、特にそのチベット自身の外交に関する考察がほとんどなされていないことが挙げられる。1912年の清朝滅亡にともない、チベットは国際社会における自己の地位の承認獲得と、その領域(国境)画定を目指したものの、1951年に中華人民共和国に編入されるに至る。近代国家の重要な条件・指標となる政治的地位と領域を、チベットはなぜ確立することができなかつたのであろうか。この二つの課題は、東アジアにおける多くの地域・民族が近代国家形成・国際社会参入の過程で直面した問題でもあり、チベット外交史研究の進展は、東アジアの近現代を考える上でも重要な意義をもつ。

チベット近代史研究は、現代中国がかかえる政治的課題に強く規定される分野であり、従来の研究成果もまた、中国あるいは海外チベット人社会から発信される、相互のナショナリズムを色濃く反映したものが多かった。他方で、一部のチベット史研究者は、チベット仏教の高僧伝や、貴族・僧侶らによる欧文・チベット文の回顧録などを用いた、チベット自身の動向に即した重要な研究を行ってきた。しかし、ダライラマ政権の外交文書・行政文書など外交史研究に必要な一次史料の活用は進展しておらず、チベット仏教思想にもとづく世界観を強く保持していたチベットが、近代的な国際秩序をどう認識し、それにいかに対応しようとしたのかは明らかにされてこなかった。

2. 研究の目的

本研究は、チベットが近代国際社会への参入を試みた20世紀初頭の外交をとりあげ、チベットの政治的地位と領域の確立に向けた模索の経緯を、高い史料価値を持ちながらも従来十分に利用されてこなかったチベット語外交史料を用いて明らかにし、これまで未開拓であったチベット外交史研究の基礎を構築することを目的とする。その際、(1)特に1912年の清朝崩壊直後におけるダライラマ13世(1876-1933)の外交の射程とその限界を実証的に明らかにするとともに、(2)近代東アジア諸地域で同時継起的に生じた、西洋政治概念・外交システムを受容・運用の過程を、チベットに即して検討し、チベットの近代を東アジア近代史、さらには世界史の中に位置づけることを目指す。

3. 研究の方法

本研究の研究方法は、20世紀初頭にダライラマ政権が各国(イギリス・ロシア・アメリカ・日本)に発したチベット語文書史料を収集し、欧文・漢文・日文史料等と比較検討することで、チベットの政治的地位と領域の確立をめぐるダライラマ政権の外交活動の実態に迫り、これを広く東アジアにおける近代的な思想・概念・制度の移植・流通というコンテクストの中で考察するというものである。

主な研究作業としては、上述のような資料と視角のもと、下記のような研究を実施する。

ダライラマ13世の移動期間(1904-1908)を通じた列強諸国との接触・連絡を、特にイギリス・アメリカの外交官・東洋学者などとの関係に注目しつつ検討すること、東・西本願寺の僧侶や日本の軍事・情報関係者との接触を通じた、チベットの対日本関係の実態の把握、

以上の研究を踏まえ、統合したうえで、清朝崩壊前後における、チベットの政治的地位と領域をめぐるダライラマ政権のイギリス・中国との交渉過程の分析をおこなう。さらに、これらの研究成果を国際的に広く伝えていくために、英語での論文執筆、学会報告を精力的におこなっていく。

4. 研究成果

(1) 調査研究の内容とその学術的意義

アメリカ合衆国の外交官にしてチベット学者であったロクヒル (William Woodville Rockhill) とダライラマ 13 世の英語・チベット語による往復書簡やロクヒル関連資料 (アメリカ議会図書館およびハーバード大学図書館所蔵) を利用しつつ、清朝崩壊以前におけるダライラマ 13 世の対外認識のありかたについて検討した。これまで近代チベット史は「グレート・ゲーム」の主体であったイギリス・ロシアとの関係に焦点を当てるものが多かった。しかし、本研究により、ダライラマ 13 世がチベットに関心をもつ仏教学者・東洋学者のネットワークを媒介として、国際社会との積極的な接触をはかり情報収集につとめ、対外関係・対中関係を模索していたことが明らかになった。

如上のアメリカとの関わりに加え、同時期、ダライラマ 13 世が、アジアにて経済的・軍事的に台頭した日本と接触し、関係構築を試みていった経緯を、北京警務学堂監督川島浪速、東本願寺僧侶寺本婉雅、西本願寺僧侶青木文教らとの関係を中心に考察した。従来の研究は、19 世紀末以降におけるロシアとチベットの接近という事実を強調してきた。しかし、本研究は川島浪速関係文書 (一茶記念館所蔵) や青木文教アーカイブ (国立民族学博物館所蔵) に含まれるチベット語書簡等を利用しつつ、日露戦争中の 1905 年 3 月以降、ダライラマ 13 世がロシアには内密に川島らと連絡をとりはじめ、日本への関心を急速に高めていたことを明らかにした。さらに、辛亥革命後には青木文教らを通じて、対中関係の緊張にともなうチベットへの支援を日本に要求していたことを、日英同盟・英露協商・日本側の外交方針などの背景を踏まえつつ明らかにした。また、¹⁾にて分析したチベット語文書資料からは、ダライラマ 13 世が、チベット語で「独立」を意味するランツェン (rang btsan) という語の用例が見受けられはじめ、清朝崩壊以前より、ダライラマ 13 世とその周辺が国際社会における自己の政治的地位のあり方について態度表明しつつあったことが明らかになった。さらに、²⁾の研究成果は、これまで日本政府や日本仏教界の動きから分析されることの多かった日本・チベット関係史の展開を、チベット側の視点・動向から検討・照射するという点においても、この研究分野の発展に寄与するものと思われる。

チベットの政治的地位と領域をめぐる問題は、清朝崩壊後、英国・中国・チベット三者によるシムラ会議 (1913-1914) の議題となった。³⁾の議論を踏まえつつ、この国際会議およびその後の外交交渉において、チベットが「独立」「自治」などの西洋由来の概念をどのように用いたのかを考察した。それにより、今日、自治 (autonomy) を意味する用語である「ランキョン」という概念が、現段階で確認可能な範囲においては、20 世紀前半の史料中に見いだせないこと、「ランツェン」は「自治」「独立」、さらには「主権」を示す訳語として 1950 年まで使用され続けており、必ずしも今日のような「独立」の固定的な対訳にはなっていないことを明らかにした。この問題については、今後も関連資料を収集し丹念に検討しつつ究明する必要があると、結論を急ぐべきではないだろう。ただし、「自治」「高度自治」「名・実をともなった自治」「独立」などの用語・概念と、その解釈が、「チベット問題」の歴史的形成過程において重要な争点となってきたことに鑑みた場合、20 世紀前半におけるチベットの政治的地位をめぐる諸概念の用例の分析は、一層重みをもつと確信するものである。

(2) 主な研究成果の概要

の研究成果としては、チベット学者ロクヒルの清朝・チベット関係史研究として名高い、“The Dalai Lamas of Lhasa and their Relations with the Manchu Emperors of China (1644-1908)” *T'oung-Pao*, Series 3, Vol.1 No. 1, 1910 の成立背景を、ダライラマ 13 世とロクヒルの交流・往復書簡を詳細に分析しつつ解明した。特に、ダライラマ 13 世がロクヒルをはじめとする欧米の東洋学者・仏教学者と接触する中で、モンゴル・満洲を含むチベット仏教圏を超えて、国際社会からの評価・視線を意識しつつ、中国・チベット関係史とチベットの政治的地位を説明する必要性を自覚しつつあったことを解明した。これと付随して、ロクヒルの外交官としての側面に焦点を当てつつダライラマ 13 世との往復書簡を検討し、ダライラマ 13 世が英領インド亡命からまもなく、「ランツェン」(独立)という用語を用いてチベットの政治的地位を表現していたことを指摘した。こうした国際社会における自己意識の確立が進む一方で、アメリカ、そして日本を含む国際社会は、チベットを領土に包摂した形態における清朝・中華民国の枠組みを支持する方向で動きはじめていたことを指摘した。

の研究成果としては、寺本婉雅・青木文教とダライラマ 13 世の關係に焦点をあてた。ロクヒルの活躍にみられるように、19 世紀末以降は仏教学・チベット学が世界の東洋学のなかで重要な位置を占めるようになった時代であり、日本でも寺本・青木といった僧籍にある人々がチベット語・チベット仏教への理解を深めつつ、チベットそしてチベット仏教の高僧たちに接近した。この研究では、特にダライラマ 13 世から青木文教へと宛てられたチベット語書簡の分析とその歴史的な位置づけを考察し、英露協商がチベット外交への制約となるなか、ダライラマ政権にとって、日本の対中関係における軍事的・政治的影響力が重要な意味を持ち始めていたことを指摘した。さらに、ダライラマ 13 世から川島浪速に宛てたチベット語書簡 2 通をとりあげ、それを同時期にダライラマがロクヒルなどに宛てた書簡と比較検討しつつ、日露戦争下において日本とチベットが接近していった経緯を明らかにした。これまで、日本・チベット関係の端緒は東西本願寺の僧侶たちの果たした役割に注目しつつ説明される傾向にあったが、この研究では、寺本婉雅との接触(1906 年末)以前の段階において、すでにチベットと日本の双方がともに連絡の機会をうかがい、対ロシア戦における日本側の「特別任務班」を通じて接触していたことが明らかになった。さらに、「チベット・明治日本の邂逅と辛亥革命：チベット仏教圏の近代と日本仏教界」マシュー・オーガスティン編『明治維新を問い直す』(九州大学出版会、2020 年 3 月、109-130 頁)は、如上の研究成果を発展させ、その内容を一般向けに平易なことばで伝えることを試みたものである。その際、特に、これまで漢人革命家やその日本人支援者の視線から考察される傾向にあった、辛亥革命と日本というテーマを、チベットおよび「チベット仏教圏」をキーワードに、東アジアから内陸アジアにかけての政治変動のなかでとらえていく視座を提供した。

の研究成果としては、チベットにおける「自治 (autonomy)」概念形成をめぐる基礎的考察を行った (Ryosuke Kobayashi “The Emerging Concept of ‘Autonomy’ during the Early 20th Century Tibet,” *The Effect on Inner- and East Asian Relations of the Advent of Modern International Law and the End of the Qing Empire*, Oxford University, September 2017) が重要なものとなるだろう。特に後者は、『蒙蔵月刊』をはじめとする雑誌資料、中華人民共和国成立直後のチベット語文書資料などにも分析の射程を広げ、「自治 (ランキョン)」というチベット語の政治概念が、1950 年以降に中国語から導入・翻訳された用語である可能性が高く、ダライラマ

政権はほぼ一貫して「独立（ランツェン）」を使用し続けていたと考えられることを指摘した。

の研究成果の対外的・国際的発信としては、以下のものがあげられる。まず の研究成果は、石濱裕美子（早稲田大学教授）を主編とする英語論集の第一章・第六章に一部反映しつつ、刊行を実現している（Ishihama Yumiko, Tachibana Makoto, Kobayashi Ryosuke, Inoue Takehiko, *The Resurgence of “Buddhist Government”: Tibetan-Mongolian Relations in the Modern World*, Osaka: Union Press, 2019）。さらに の研究成果“The Emerging Concept of ‘Autonomy’ during the Early 20th Century Tibet”は、国際セミナーの招待講演における報告であり、その成果の一部は、Okamoto Takashi ed., *A World History of Suzerainty: A Modern History of East and West Asia and Translated Concepts* (Tokyo: Toyo Bunko, 2019) に反映されている。これらに加え、チベット軍事史の国際共同研究（The Tibetan Army of the Dalai Lama, 1642-1959）に参加しつつ、2017~2019年度の間に、2本の英語による研究論文、および3回の国際学会あるいは国際シンポジウムでの英語報告を実施している。

（3）今後の展望

については、特にアメリカ・チベット関係という視点からさらなる発展が期待しうると思われる。第一次世界大戦後にアメリカが国際的な影響力を高めていくなかで、それまでイギリスとの関係を重視していたチベットにも、アメリカの存在が少しずつ視野に入りはじめたと考えられる。このチベット側の動きは、第二次世界大戦、インドからのイギリス撤退（1947年）そして冷戦の始動という事態によって段階的に顕在化したものと思われ、イギリスからアメリカへと支援者が変遷していくプロセスを跡づける必要があるだろう。

のチベットの対日関係については、満洲事変以降に本格化していった日本の「喇嘛教工作」など、チベット仏教圏に対する政策・情報活動との関わりに注目しつつさらなる検討が必要になっていくであろう。また、 の研究成果のなかで提起された論点についても、分析を深めるべき問題が多い。漢語・英語・チベット語の翻訳概念をめぐる認識の齟齬が、20世紀前半のチベットをめぐる外交交渉にいかなる影響を与えたのかを包括的に明らかにするためには、新史料のさらなる調査・収集を通じて慎重な検討をすすめていく必要がある。また、本科研では、研究成果を単著として刊行することを当初の目標としていたが、研究遂行の過程で、第一次世界大戦以後の外交交渉に対する研究を十分に実施した上で、その成果を収録した単著が望ましいと判断したため、その計画を修正し、本科研の目標の一つである研究の国際的発信に一層の注力をしつつ活動した。現在、本科研を継承するプロジェクトとして、「第一次世界大戦後の国際関係とチベット外交」（2020年度 基盤研究 C：課題番号 20K01002）が始動している。単著は、この新たな科研にて、時間軸を19世紀末から1930年代まで拡大しつつ、一層充実した内容として刊行する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 KOBAYASHI, Ryosuke	4. 巻 53
2. 論文標題 Zhang Yintang 's Military Reforms in 1906-1907 and their aftermath The Introduction of Militarism in Tibet	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Revue d'Etudes Tibetaines	6. 最初と最後の頁 303-340
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小林亮介	4. 巻 1
2. 論文標題 日本・チベットの邂逅と辛亥革命：チベット仏教圏の近代と日本仏教界	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 マシュー・オーガスティン編『明治維新を問い直す：日本とアジアの近現代（地球社会ライブラリ1）』九州大学出版会	6. 最初と最後の頁 117-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小林亮介	4. 巻 41
2. 論文標題 ダライ・ラマ13世の川島浪速宛書簡にみるチベット・日本関係：日露戦争とチベット問題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 史滴	6. 最初と最後の頁 202-225
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 KOBAYASHI, Ryosuke	4. 巻 27
2. 論文標題 Militarization of Dargye Monastery: Contested Borders on the Sino-Tibetan Frontier during the Early Twentieth Century	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Cahiers d ' Extreme-Asie	6. 最初と最後の頁 139-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KOBAYASHI, Ryosuke	4. 巻 20
2. 論文標題 The Political Status of Tibet and the Simla Conference (1913-194): Translated Concepts in Modern Tibet	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Okamoto Takashi., A World History of Suzerainty: A Modern History of East and West Asia and Translated Concepts(Toyo Bunko Research Library)	6. 最初と最後の頁 199-215
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 KOBAYASHI, Ryosuke	4. 巻 1
2. 論文標題 The Tibet-Japan Relations in the Era of the 1911 Revolution-Tibetan Letters from the Aoki Bunkyo Archive	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Iwao Kazushi, Ikeda Takumi (eds.), The Historical Development of Tibeto-Himalayan Civilization(チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開),	6. 最初と最後の頁 101-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林亮介	4. 巻 なし
2. 論文標題 ロクヒルと近代チベット その清・チベット関係史研究の成果をめぐって	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 斯波義信・岡本隆司編『改訂増補：モリソン・パンフレットの世界』東洋文庫	6. 最初と最後の頁 123-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件(うち招待講演 4件/うち国際学会 6件)

1. 発表者名 小林亮介
2. 発表標題 チベットと明治日本の邂逅：日露戦争から辛亥革命まで
3. 学会等名 清末～中華民国期における日中間の交流：周縁諸地域を中心に(中央大学政策文化総合研究所プロジェクト・チーム「ユーラシアと日本：移動・交流と社会文化変容」)(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小林亮介
2. 発表標題 第一次世界大戦後とチベット問題：シムラ会議後の中・英・蔵関係
3. 学会等名 東アジア近代史学会例会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KOBAYASHI, Ryosuke
2. 発表標題 Militarization of Dargye Monastery: Contested Borders on the Sino-Tibetan Frontier during the Early Twentieth Century
3. 学会等名 Buddhism and Violence in Asia: The Case of the Military in Tibet during the Ganden Phodrang Period (1642-1959)（招待講演） （国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KOBAYASHI, Ryosuke
2. 発表標題 The Ganden Phodrang Army and the Sino-Tibetan Border Conflict in 1918
3. 学会等名 The 15th International Association for Tibetan Studies Seminar in Paris（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林亮介
2. 発表標題 日本・チベットの邂逅と辛亥革命：チベット仏教圏の近代と日本仏教界
3. 学会等名 九州から見た明治維新とアジアの近代化（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KOBAYASHI, Ryosuke
2. 発表標題 Zhang Yintang 's Military Reforms in 1906-1907: The Introduction of Militarism in Tibet
3. 学会等名 Military Culture in Tibet during the Ganden Phodrang Period (1642-1959) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林亮介
2. 発表標題 ダライラマ13世の亡命と対外関係 (1904-1912) : W.W.Rockhillとの関係を中心に
3. 学会等名 七隈史学会第20回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KOBAYASHI, Ryosuke
2. 発表標題 The Emerging Concept of 'Autonomy' in Early 20th-Century Tibet
3. 学会等名 The effect on Inner- and East Asian relations of the advent of modern international law and the end of the Qing empire (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 KOBAYASHI, Ryosuke
2. 発表標題 Contested Borders in the Sino-Tibetan Frontier (1906-1914) Negotiations and Conflicts in Eastern Tibet
3. 学会等名 Association for Asian Studies (AAS): AAS in Korea, 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ISHIHAMA Yumiko, TACHIBANA Makoto, KOBAYASHI Ryosuke, INOUE Takehiko	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Union Press	5. 総ページ数 242
3. 書名 Resurgence of "Buddhist Government": Tibetan-Mongolian Relations in the Modern World	

〔産業財産権〕

〔その他〕

The Tibetan Army of the Dalai Lamas, 1642-1959 https://tibarmy.hypotheses.org/

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----